



今月のことば 2007年9月

『あるがまま』って何ですか？

阿弥陀さまは『あるがままの私』を、そのままお救いくださるといいます。では『あるがまま』とは、どんなことをいうのでしょうか？「ゆっくりと自然体でいる私」「無理せず自由な私」など、良い状態の自分を思い浮かべる方が多いのではないのでしょうか？

この『あるがまま』という言葉について、作家の田口ランディさんが、本願寺福岡会館で行った講演の中で、おもしろい解釈をされていました。



田口さんの一家は、父親がアルコール依存症、弟は15年にわたる引きこもりの末に自殺してしまいます。母親も家庭のことでノイローゼになった上、脳出血で弟のあとを追うように亡くなりました。田口さんは、自分が弟をどこかでやっかいもの扱いしていた気持ちや、父への愛憎など、家族との葛藤を赤裸々に語っています。

私は家族のことを話していると、やはり悲しくなって泣けてしまいます。そうした私を見られて、すごく恥ずかしいです。でも、そういう私が『あるがまま』ってことです。そういう私をじっと耐えていることが、『あるがまま』ということです。

人間あるがままにいるというのは、いま、居心地の悪さを耐えている私のことです。悲しい私でいることです。怒りに燃えている私のことです。



自分の中に沸き起こる苦しみや悲しみ、他者への憎しみや不満……。人間である以上、こうした負の感情から無縁でいることは不可能です。**実は『あるがままの私』とは、こうした負の部分も含めた己の姿に気づかされていくことではないでしょうか。**

『あるがまま』を受け入れた田口さん。アルコール依存症の父親との現在の関係を、次のように話されています。

アル中で一番苦しいのは、私じゃなくて、父なんだと思うようになりました。今までは、父が酒を飲むと私が苦しかった。家族の悲しみは私の悲しみで、私を苦しませ悲しませる家族は、私の不幸を願っているとさえ思っていました。

お酒に負けて自分の大事なものを失ってしまう。父の業(ごう)を背負っているのは、私じゃなく本人なんだという思いに至りました。それから私は父に、お酒を飲むなどは言いません。兄が死んで、母が死んでもやめられない業を背負っているのであれば、私は見守ってやるしかないんじゃないかと考えました。

最近、父はそんなに飲まなくなりました。『あるがままの父』を見つめるようになったので、父はたぶん、安心したんじゃないかと思います。